

でした。その考え方が反映して、私たち姉妹は中学校に入るとすぐに、否応なく家庭教師と塾とで勉強させられ、夜間の英文タイプ・クラスへもやらされました。その究極は、外資系の就職に強いと言われた同じ外語短大卒業。その後、姉妹3人三様にすすんだ道は、物心つくかつかないかの内の親からの影響（しぼり）が、色濃く出たものになっています。

父が子どものために思い、学業の中心に「英語」を選んだ結果は、私が何とかアメリカで生活していける「道具」となりました。それでも、「英語」に影響された生活は、自分で選んだわけではないという思いが、私の中に常にあります。言い換えれば、自分の選択肢を自分が作り、それを選べる「選択権」を持っていなかった、と考える原因ともなっているのです。その思いが「いまの自分を楽しめている？」という疑問が教訓となり、親は子どもの人生の手助けをする脇役であり、決して主役になってはいけないという考え方が、私の子育ての姿勢となりました。

### <長女の選択>

12年生になったばかりの長女が、大学へは進学したくないと言いついた事があります。小学校5年生の頃から、将来は弁護士になるのだと宣言し、「哲学科」への進学を常日頃言っていた子どもの言葉とも思えません。進学しないで、何か他にしたい事が出来たのか聞いてみると、「働きたい」と言います。

長女は幼児期から現在まで、「絵画」を含め美術全般に興味を惹かれてきました。どういうわけか一度も習わせた事がないのに、大きな絵画などのコンテストでそこそこの結果を残した事が、ますます自分の「特技」と言える自信につながっていきました。さらに、独学から専門的な技術を身につけたいと思い始め、いろいろ調べてみたのでしょう。結果は、総合大学への進学とは桁違いにお金がかかるという事が分かったため、「働きたい」となったようです。

どちらにしても、夫婦とも「美術」に関する事は全く分からないので、相談にも乗ってやれません。夫の知り合いで、同じように絵描きを目指し、プロとなった有輝さんと弁護士になったロバートさんから、お話をうかがう事になりました。有輝さんは、我が家の子ども達がオチビさんだった頃から、一緒に遊びながら「見る事や描く事」の楽しさを教えてくれた人です。おそらく、長女の将来の姿として考えられる二通りの道に進んだ大人の話は、「美術で身を立てるのがいかに大変か」に終始しました。有輝さんは、「自分はプロとは言っても、絵が売れなくては生活できないので、アルバイトで生計を立てている」と。「大学を卒業してからも勉強するチャンスはある」とアドバイスしたのは、パート・タイムで美術系の学校へ行っているロバートさん。このお二人の



故人の初孫 匠人（なると）ちゃん（6ヶ月）

話から、長女は自分なりに納得し、予定通り総合大学への進学を決めました。

10年経った現在、長女は大学院を休学し、ウェブ・デザインのインターンを始めました。「お母さん、楽しんでやっているよ」という電話をもらって、彼女が「初志」を忘れていなかった事に、びっくりしました。

### <伝えたいのは>

子ども達自身がもともと持っている生きる力を、少しでも強くしてやれる手助けをと、子ども達との毎日の生活の中から試行錯誤してきました。その過程で、子ども達自身で生き方の選択肢を広げる事は、自分の環境を豊かにする事であり、それが子ども達の自信にもつながるのだと、私の目には映ってきました。その自信により、きっと「いまの自分を楽しめる」のだという事も。もし子ども達それぞれに、そんなふう楽しんでいる姿が見られたなら、きっと何物にも代えがたいのでしょうね。

\*春爛漫、桜が満開の中で姉の一周忌を迎え、思い出とともにこの記を綴らせていただきました。

### 松本 康子（まつもと やすこ）

1979年、夫の留学で、1歳半の長女を帯同し渡米。その後、アメリカで次女、三女を出産。専業主婦として子育てと教育を担当。

子ども達は、親から見てうらやましいバイリンガル・バイカルチャーの大人に育ちました。しかし、「アメリカで日本人の子どもをバイリンガルに育てた」私が、実は、子どもに育てられていたのです。このコラムでは、「海外でともに育った母と子」の悪戦苦闘の姿を紹介させていただきます。皆さんの海外での子育ての参考になりますでしょうか？



渡米直後の不安な生活を、アメリカ人の友人達と助け合いながらスタートしサバイブした康子さんの成長の記録です。

マイルズもセーラも UCLA の学生でした。生まれも育ちも全く違う世界中から集まった人たちが、学生の家族という共通項だけで結ばれて、貧しくとも有意義な生活を送ったのです。

その生活と友人関係を通して、「母と子は共に育った」のです。